

ヤコウガイの放流適地と成長について

はじめに

ヤコウガイは重さが殻付きで 3kg に達する大型の巻き貝で、サンゴ礁域の 25m 以浅に生息しています。身は食用、殻は螺鈿の材料や装飾品として利用されています。栽培漁業センターでは、奄美群島振興開発事業で平成 3 年度からヤコウガイの種苗生産と放流技術の開発に取り組んできましたが、ここでは放流試験をとおしてわかってきたことをいくつか述べたいと思います。

放流適地

平成 11 年 9 月のことですが、徳之島で調査をしていたところ、伊仙のリーフ(写真 1)にヤコウガイの稚貝が大量にいるとの情報がありました。早速行ってみると殻高(殻の高さ)3cm 前後の天然の稚貝を潮間帯にたくさん見つけることができました。



写真1 天然稚貝が多数見られた場所(干潮時)

それまで天然の稚貝を見つけたという事例は数例あるぐらいでした。稚貝が写真 1 のような場所で見られたことやそれ以前に潮下帯に放流した稚貝が潮間帯に移動する傾向があったり、放流稚貝が通常自分の大きさにほぼピッタリの穴に潜んでいることなどから、放

流適地を以下のように結論づけました。

深みへの移動が容易なリーフ先端部の潮間帯

隠れ家となる様々な大きさの穴が多数あるところ

微小な藻類を含め餌料が豊富であるところ
土砂の影響を受けないところ

これは後にインターネットで見つけた文献の中で Amos (1996) が西サモアでの生息条件として示したという特徴とほぼ同じでした。

現在はサイズ別の放流後の生残を調査していますが、3 ~ 3.5cm の場合 4 ヶ月後に 20 % 前後を見つかることができましたが、2 ~ 3cm になると 10 % 未満しか見つけることができませんでした。減耗の原因は放流種苗の元気さもありませんが食害がほとんどだと思えます。カニやタコや大型のペラやモンガラカワハギの仲間に食べられているようです。12cm の大型貝にも食害跡が見られ、こちらはエイか亀によるものではないかと考えています。また、人による採捕も多いと思われ、現在支庁が主体となって体験放流も行っていますが、奄美海域ではこの貝に限らず、リーフ内で採捕できる漁業資源については、一般住民も含めた資源保護の啓発を精力的に行う必要性があると思えます。

放流については、上記に示した場所へ 3cm 以上のものを殻の大きさにあった穴に入れ込む方法で行えば、ある程度の生残は望めるものと考えています。

成長

次に成長に移りますが、センターの見学者などから 20cm 弱の親貝を見て「これは何歳ですか？」との質問をよく受けます。担当に

なりたての頃は「10歳ぐらいですかね。」なんて適当に答えていました。

しかし、実際はそれよりかなり成長が速く、1年に4～5cmも成長することが私たちのこの試験からわかりました(図1,写真2)。3cmで放流したものを30ヶ月後の調査で再捕することができ、それは14.5cmに成長していました(写真3)。3cmになるまでに条件がよければ1年といわれていますので、20cmになるには5年ぐらいと思われる。

ところで、成熟サイズは12cmといわれていますので、写真3の貝はすでに再生産に加わり資源増大に貢献しているものと思います。

大型になると浅場には隠れる穴や大型の海藻もそれほどないので、深みへ移動する傾向があり再捕が難しく、写真3の貝はその後の調査では再捕されていません。今後は天然個体も含め15cm以降の成長も把握して成長式を出せればと考えています。

最後に

奄美でも水揚げ量の多い徳之島漁協でその量をみてみると、昭和59年頃は3t前後であったものが、62年にはソウルオリンピック開催によると思われる螺鈿の需要増加の影響で7tと乱獲に陥り、その後減少し現在は1.5t前後となっています。

ところが、最近また北京オリンピックに向け殻の値段が上昇しているとの不吉な噂も耳にしています。

沖縄県では20cm以上の貝がほとんど捕れないほど資源が減少していると聞いています。本県でもそのようにならないためにも、種苗生産・放流技術を早急に確立をするとともに、稚貝の保護を始め秩序ある採捕が行われことが大切であると感じています。

(栽培漁業センター 猪狩)

文献

A.Trevor(2000):SPC Trenchus Information Bulletin #6,11

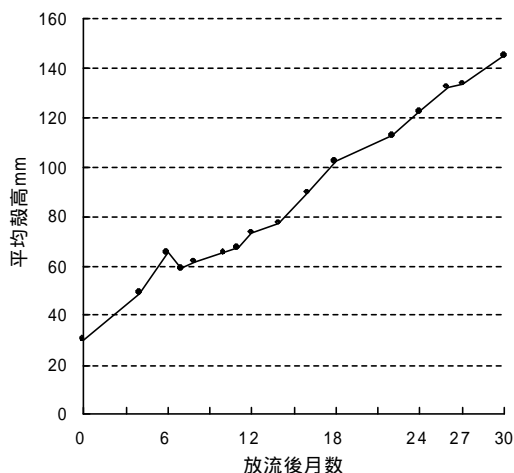


図1 母間での放流貝の成長



写真2 放流貝の成長：左から放流時、4,6,15,19,28ヶ月後、定規は18cm



写真3 放流30ヶ月後に再捕された貝(3cm 14.5cm)、ノギスの目盛りは17cm